室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

ドイツ・トリーア大学の日本語教育--2007年実施アンケート調査の報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2013-12-03 キーワード (Ja): トリーア大学日本学科, 日本語学習の理由, ドイツの大学制度 キーワード (En): 作成者: 田村, 建一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2702

北海道言語文化研究　　北海道言語研究会
No. 9, 125-140, 2011.

ドイツ・トリーア大学の日本語教育
―2007 年実施アンケート調査の報告―

田村　建一

Japanese Education in Trier University:
A Report on the Inquiry Practiced in 2007

Kenichi TAMURA

要旨：本稿は、ドイツの大学で行われている日本語教育のひとつの事例として、トリーア大学日本学科を採りあげ、その教育内容や登録学生数、修士号取得者数などを紹介し、さらに日本学主専攻用の「日本語１」の受講者に対するアンケート調査の結果を報告するものである。アンケートは 2007 年 1 月から 2 月にかけて行われ、主として日本語を学ぶ理由や日本に関する興味の対象を訊ねた。計 72 人から得られた回答を分析した結果、「日本語を学ぶ理由」としては、「日本や日本人あるいはその文化に対する関心から」と「言語に対する関心から」の回答がそれぞれ 70%を超え、両方をともに挙げた回答も約 50%あった。「興味の対象」に関しては、当初の予想に反して「漫画やアニメ等のポップカルチャー」を挙げた回答（26%）はそれほど多くなく、むしろ「歴史」（32%）や「言語」（25%）を挙げた回答がポップカルチャーと同程度の比率を示すのは意外であった。日本学を専攻する学生数の急増が必ずしも社会における流行現象からのみ説明できないように思われる。なお、本調査は、トリーア大学の人文科学系の専攻にバチェラー・マスター制度が導入される以前の、伝統的なマギスター制度のほぼ最後の時期に行われた。

キーワード：トリーア大学日本学科、日本語学習の理由、ドイツの大学制度

1. はじめに

筆者は、勤務先である愛知教育大学のサバティカル・イヤー制度を利用して、2006 年 9 月から翌年 2 月までドイツのトリーア大学で研修を受けた。研究分野は歴史言語学であったが、たまたまトリーア大学には日本学（Japanologie［ヤパノロギー］）専攻が設置されているため、研修期間の最後に、この専攻に学籍登録して日本語を学び始めた学生 72 人に対して、日本語を学ぶ理由や日本に関する興味の対象などを訊ねるアンケート調査を行った。本報告は、この調査の結果を公表し、分析を加えるものである。なお、調査結果はすでに愛知教育

大学国際教育学会第 8 回研究大会（2009 年 2 月 14 日）において口頭発表として公表されている。

また、トリーア大学法学部でも日本語学習者に対して同様の調査を行った。こちらのほうは回答者数が 2 種類のクラスを合わせても 12 人と少なかったため、参考程度に調査結果を報告する。

アンケート調査の報告に先立ち、トリーア大学日本学科の教育内容や登録学生数、修士号取得者数の変遷について、また、日本学科以外の学生のために開講されている日本語の授業について若干説明する。

2. トリーア大学日本学科

トリーア（Trier）は、古代ローマ人が紀元前 1 世紀に建てたドイツ最古の都市で、多くのローマ遺跡を有する。特に観光客にとってはポルタニグラ（黒い門）が有名である。また、中世においては神聖ローマ帝国の選帝侯の一人であるトリーア大司教の拠点として重要な都市であった。現在の人口はほぼ 10 万人である。

トリーア大学は、1970 年に設立された、文科系を中心とする大学である。大学のホームページ（以下 HP）に掲載されている統計データ（2009 年 5 月時点）によれば、学生数が約 14,600 人（女性が約 60%、外国人が約 12%）で、その内 4,075 人が新規登録者である。学生数は年々増加し続けていて、2000 年の時点の 11,046 人と比べると、9 年間で 3,500 人以上も増えたことになる（以上、「大学の統計 2009 年」[1] に基づく）。

トリーア大学日本学科は 1985 年に設立された。2009 年 12 月現在の専任教員の構成は以下のとおりである（学科の HP [2] に基づく）。

教授 3 人：Stanca Scholz-Cionca、Hilaria Gössmann、Andreas Regelsberger（全員女性）
その他の専任教員 3 人：Noriko Katsuki-Pestemer［香月典子］、Tomoyuki Shitaba、Renate Jaschke

筆者がトリーアに滞在した 2006／07 年冬学期 [3] 当時の日本学科の登録者数は全体で次のとおりであった（当時の学科秘書であった Ulrike Poelcher 氏からの情報に基づく）。

主専攻　217 人（女性が約 6 割を占める）
副専攻　 74 人

ここでドイツの大学制度について説明を加えたい。これまでドイツの大学における人文科学系の専攻には、日本の学士号にあたる資格がなく、学生はみな、教員免許取得だけを目的とする場合をのぞき、学芸修士（Magister Artium = M.A.）の資格取得をめざした。修士号を得るためには、主専攻を二つ修めるか、あるいは主専攻一つと副専攻二つを修めなければならず、修了までにふつう 6～7 年以上の期間を要した。それだけにこの資格は、日本の文学修

士号よりもはるかに高い評価を社会の中で得ている。

しかし、ヨーロッパ内の高等教育課程の均一化をめざすボローニャ宣言（1999 年）に基づき、ドイツの大学も Bachelor-Master 制度（3 年間[4]で学士号を取得し、希望者はその後に修士課程に進む）を採り入れることになり、トリーア大学の人文科学系の専攻においては、2008／09 年冬学期の新入生からこの新しい制度が適用されている。

本稿で報告するアンケート調査は、この新制度が始まる 2 年前の 2006／07 年冬学期に行われたものであり、したがって報告の内容は、従来の制度のほぼ最後の時期に日本学を専攻し始めた学生に関するものであることに留意されたい。

日本学を主専攻とする学生は、基礎課程（最初の 4 学期間）の各学期に「日本語」１、２、３、４（それぞれ週 8 時間）を履修しなければならない。筆者が籍を置いたドイツ学科（ゲルマニスティク）では、冬学期、夏学期のどちらにも新入生の必修科目（基礎ゼミナール１・歴史言語学入門）が開講されているが（ただし、冬学期のほうが開講クラス数は多い）、日本学科では、冬学期からしか学習を開始することができず、「日本語１」と「日本語３」が冬学期に、「日本語２」と「日本語４」が夏学期に開講されている。なお、ドイツの大学では授業は時間割の上では一回 2 時間行われることになっているが、じっさいには Akademisches Viertel（大学の 15 分：授業が定刻より 15 分遅れて始まり、15 分早く終わること）が伝統となっているため、日本と同様、90 分間行われるのが一般的である。また、授業数は 15 回（期末試験は別）である。

トリーア大学日本学科では、アンケートを実施した 2006／07 年冬学期から日本学の履修を始めた学生が例年よりかなり多く、当初 100 人近くに達することも予想されたため、授業担当者の香月氏によれば、「日本語１」を例年 2 クラス開講しているのに対して、この学期は 1 クラス分増やして 3 クラスにしたとのことである。[5]

この年度の冬学期から始まる「日本語」の授業で使用された教科書は、香月典子著 ”Grundstudium Japanisch（基礎日本語）” (全 2 巻)であり、その後、4 学期目の終わりまでに 2 冊すべてが終了したとのことである。各学期の期末試験は、120 分かけて行われる。追試験も実施されるが、毎学期不合格者が何人か出るそうである。基礎課程では、学生はこのほか日本地域研究や日本史に関する基礎ゼミナールや講義を履修する。

4 学期終了後の中間試験（Zwischenprüfung）に合格すると、学生は専門課程に進むことができる。大学のウェッブサイトに掲載されている「授業一覧」（Vorlesungsverzeichnis）[6]から、日本学科専門課程の演習科目のいくつかを 2008 年夏学期を例に挙げると、以下のとおりである。

・古典文献講読（古文、漢文）
・近代以前の文献講読（百人一首、歌舞伎・浄瑠璃）
・狂言入門
・森鴎外と夏目漱石
・民芸と観光

・日本仏教入門
・性に関する学術書の翻訳

これらの例から、古典的な文献の講読に関わる授業も一定数開かれていることがわかる。

日本学科の秘書 Ulrike Poelcher 氏から提供された過去の修士論文題目の一覧から、2005 年と 2006 年の分の題目を挙げると、以下のとおりである（これですべてである）。

・日本の食文化の美学
・日本における身体障害という視点から見たテレビドラマ『ビューティフルライフ』
・談話分析：靖国論争における保守側の論点
・毘沙門の起源：室町時代の本地物
・初期狂言集における人称代名詞の問題

2 年間で修士号取得者がわずか 5 人しかいないというのは、あまりにも少なすぎるように思えるが、これはこの期間だけに見られた特殊な事例ではなく、また日本学科だけが特別に厳しいわけでもなく、従来のドイツの大学制度における修士号取得のために要求される学術レベルの高さを端的に示す例である。

ちなみに 1997 年から 2008 年までの 12 年間の日本学科における修士号取得者数を「大学の統計 2007 年」48 頁および「大学の統計 2009 年」42 頁によって探ると、以下のとおりである。

97 年（4 人）　98 年（3 人）　99 年（10 人）　00 年（4 人）　01 年（7 人）
02 年（3 人）　03 年（1 人）　04 年（4 人）　05 年（3 人）　06 年（2 人）
07 年（3 人）　08 年（8 人）　＊年平均 4,3 人

これに対して、日本学科への入学者（＝新規登録者）の数はどうかといえば、以下に示す 10 年間で 3,5 倍ほどの増加が見られた（「大学の統計 2007 年」34 頁による）。すべて冬学期における数値である。

97／98 年（23 人）　98／99 年（21 人）　99／00 年（15 人）　00／01 年（24 人）
01／02 年（28 人）　02／03 年（36 人）　03／04 年（45 人）　04／05 年（51 人）
05／06 年（58 人）　06／07 年（81 人）

「大学の統計 2009 年」46 頁によると、2008 年の日本学修士号取得者（8 人）の平均在籍期間は 14,0 学期、すなわち 7 年であるので、仮にこの 8 人が 01／02 年冬学期に入学したと見なして計算すると、入学者 28 人中の 8 人、すなわち 3 割弱ほどの学生しか修士号を取得していないことになる。ほかの年について同様に計算すれば、もっと低い取得率になりそうである。また、ほぼ同様の修士号取得率が、中国学科やスラブ・ロシア学科に関しても当ては

まる。

参考までに、アンケート調査を実施した 2006／07 年冬学期の「日本語１」の受講者 81 名（ただし回答者は 72 人）について、その後の進級状況を授業担当者に訊ねたところ、その 2 年後に中間試験に合格して専門課程に進むことができたのは、47 人であったとのことである。

こうした厳しい現実は、当然、大学生にも大学をめざすギムナジウムの生徒にも知られているはずであるが、それにもかかわらず年々日本学専攻を希望する学生が増え続けているのはなぜであろうか。筆者はまず、アニメや漫画などのいわゆる日本のポップカルチャーがドイツの若い世代の間でかなり流行しているという背景が大きく関与していると予想していた。実際にどうであったのか、後述する。

3. 日本学科以外における日本語コース

トリーア大学では、日本学科の「日本語」とは別に、全学共通の外国語科目として「日本語」１、２、３、４（それぞれ週 4 時間）が開講されている。副専攻として日本学を選択する学生はこちらの「日本語」を履修する。

また、これとは別に、法学部内で「日本語」１、２、３、４（それぞれ週 4 時間）と「日本語会話」（週 2 時間）が開講されている。2006／07 年冬学期の法学部「日本語１」は 12 人が履修していた（後述のようにアンケートへの回答者は 8 人であった）。授業担当者（高橋優氏）から提供されたその後の情報によると、この 12 人のうち 2 年間で「日本語４」まで修了したのは 7 人であったとのことである。また、「日本語会話」はつねに数名が受講するとのことである。

日本語の学習と関連して、トリーア大学では次のようなユニークな資格制度が設けられている。それは Zertifikat “Ostasiatische Studien”（履修証明「東アジア研究」）と名づけられている付加的な資格で、専攻に関係なく、以下の二つの分野の科目を規定に従って履修することにより取得することができる。

言語科目：週 16 時間分（全学共通の「日本語」、「中国語」、「韓国語」のうち一つの言語の科目の１～４をすべて履修する）

専門科目：週 16 時間分（「東アジアの政治」、「日本地域研究」などから 8 つ以上を選択して履修する）

最近、日本のいくつかの大学においても、例えば法学や経済学を専攻しつつ英語以外の外国語を集中的に履修できる制度が創設されていると聞いているが、言語学習に専門科目を組み合わせた、上記のような資格制度は、おおいに注目されるべきではないかと考える。

4. 日本学科「日本語１」履修者に対するアンケート調査の実施概要

2006／07 年冬学期に日本学科で開講された「日本語１」（週 8 時間）の履修者に対し、日本語を学ぶ理由や日本に関する興味の対象等を訊ねるアンケート調査を実施し、計 72 人から

回答を得た。この調査は、授業の一部を担当していた高橋優、萩原恵介、林美香子の各氏の協力によって実現したものである。

上述のように、この学期の「日本語１」は 3 つのクラスに分かれて開講された。各クラスのアンケート実施日と回答者の数は以下のとおりである。

A クラス（回答者 34 人）: 2007 年 2 月 7 日（水）
B クラス（回答者 24 人）: 2007 年 1 月 31 日（水）
C クラス（回答者 14 人）: 2007 年 2 月 7 日（水）
＊A クラスと B クラスは、筆者が直接クラスに出向いて説明し回収した。C クラスは授業担当者（林氏）が説明し回収した。

アンケートの質問項目は以下のとおりである。

属性や専攻等に関する質問項目
1. 国籍
2. 性
3. あなたはドイツの大学で学び始めて何学期目ですか。また、もし他の国で学んだことがあるなら、どこで何学期間学びましたか。
4. 主専攻
5. 副専攻
6. 課程の最終目的（記載例として「ドイツ語教員免許、ゲルマニスティク修士号など」を示す）

日本語学習に関する質問項目
A: なぜ日本語を学んでいますか。（Warum lernen Sie Japanisch ?）
B: 日本の何に興味がありますか。（An welchen Dingen von Japan haben Sie Interesse ?）
C. 近い将来、日本に留学する予定はありますか。もしあるなら、それはいつですか。（Haben Sie vor, in naher Zukunft in Japan zu studieren ?　Wenn ja, wann ?）

5. 日本学科のアンケート集計結果

5.1　属性や専攻等に関する質問項目

被調査者の属性や大学在籍期間、専攻、学業の最終目標は、以下のとおりであった。

項目１．国籍
ドイツ：62 人（86%）
ルクセンブルク：4 人
その他：6 人

（ドイツ／チュニジア、アイスランド／ルクセンブルク、ロシア／ドイツ、ウクライナ、ナイジェリア、セントルシア）＊スラッシュ付きは二重国籍者を示す。

項目２．性：　女性 42 人（58%）、男性 30 人（42%）

項目３．ドイツでの大学在学期間

１学期目：49 人（68%）　　２学期目：4 人
３学期目：9 人（13%）　　４学期目：1 人
５学期目：5 人（7%）　　６学期目：1 人
７学期目：3 人

７学期目の学生の 2 人と５学期目の学生の 1 人は、日本学とともに中国学も主専攻としている。彼らは大学入学後まず中国語の学習を始め、ある程度のレベルに達してから日本語の学習を開始したと思われる。ただし、彼らが中国学の専門課程に進級しているかどうかは不明である。

ドイツ以外の国の大学での学習経験者は 2 人だけであった。一人（ルクセンブルク国籍）はルクセンブルクで 4 学期間、もう一人（セントルシア国籍）はイギリスで BA (=Bachelor of Arts) を取得している（在学期間は不明）。

項目４．主専攻

主専攻を二つとり、そのうちの一つとして日本学を履修している学生は 45 人（63%）であった。日本学とともに履修されている主専攻を上位 6 学科のみ挙げると、以下のとおりである。

経営学：12 人　　中国学：6 人　　ドイツ学：5 人　　社会学：4 人
歴史学：3 人　　美術史：3 人

主専攻を日本学とし、他に副専攻を二つ履修する学生は 22 人（31%）であった。

上記二つの履修の仕方で日本学を主専攻に選んだ学生の合計は 67 人（93%）である。他の 5 人は、次の項目で述べるように、日本学を副専攻として履修する学生であった。

項目５．副専攻

日本学を主専攻とし、他に副専攻を二つ履修する学生 22 人の副専攻の組み合わせは、多様性に富み、二人以上に見られた組み合わせとしては、民族学＋社会学（3 人）と国民経済学＋教育学（2 人）のみが挙げられる。

組み合わせの一つに選択された学科の上位 5 つは次のとおりである。なお、副専攻を一つしか挙げなかった学生が 4 人いた。もう一つの副専攻が未定だったのかもしれない。

社会学：7 人　　教育学：6 人　　国民経済学 4 人　　美術史 4 人　　民族学 3 人

上述のように、日本学を副専攻として履修している学生が 5 人（7%）いた。課程の上で要求されている全学共通科目の「日本語」（週 4 時間）ではなく、あえて主専攻用の「日本語」（週 8 時間）を受講していることになる。この 5 人の主専攻は、ドイツ学、中国学、歴史学、政治学、情報学であった。

項目６．大学での学習の最終目標（資格）
以下の 2 人をのぞく全員が修士号をめざしていた。

例外１：情報学の学士（ナイジェリア国籍）
例外２：ドイツ語教員資格（セントルシア国籍）

5.2　日本語学習に関する質問項目

次に本アンケート調査の本来の目的である日本語学習に関する質問への回答について説明する。

項目 A．日本語を学ぶ理由
「なぜ日本語を学んでいますか。」という質問に対する様々な回答を分類するのは容易ではないが、あえて以下のように分けてみた。一人の回答に複数の内容が記されている場合、どちらにも数えあげる。

（1）日本や日本人あるいはその文化に対する関心から：53 人（74%）
＊その中で「人々／日本人」に対する関心を挙げたのは 5 人で、そのうち 2 人は「日本人とのいい体験」に言及している。また、「文化」の具体的な内容として、「侍」（1 人）、漫画（1 人）、ビデオゲーム（1 人）が挙げられている。

（2）言語に対する関心から：51 人（71%）
＊その中で言及のあった具体的な内容としては、「文字／漢字」への関心（3 人）と「響き」の美しさ（2 人）がある。

上記二つの理由をともにあげた人は 37 人（51%）であった。

（3）研究上必要な前提として：6 人（8%）
＊このうち 2 人が日本学＋社会学を、1 人が日本学＋歴史学を、1 人が日本学＋経営学を主専攻としている。

（4）日本で生活したい／仕事をしたい：5 人（7%）
＊このうち 3 人が日本学＋経営学を主専攻としている。

そのほか以下のような理由が挙げられた。
・誰もがやらない言語だから：3 人
・職業上のチャンスを増やすため：2 人
・ビデオ等を原作で鑑賞したい：2 人
・ビジネスの言語として：2 人

また、以上の分類とは別に、7 人が「ずっと以前から日本／日本文化／日本語に関心があった」旨の記述をしている。

項目 B. 日本の何に興味があるか
「日本の何に興味がありますか。」という質問に対しては、以下の例のように、単にさまざまな事項を列挙する人が多く、主な関心がどの分野にあるのかという点や、それぞれの事項が何を意味するのかという点（特に「国」や「文化」、「伝統」）が捉えにくかった。もっと具体的な記載を要求すべきであった。

例 1：「文化、歴史、美術」
例 2：「文化、人間、地理、食事」
例 3：「言語、文化、人間、文学」
例 4：「料理、文化、音楽、伝統」
例 5：「国、風土、音楽、流行、文化、人々」

回答を記述された内容にしたがって分類すると、以下のようになる。前項目の場合と同様、一人の回答が複数の内容にまたがって分類されることもある。

（1）文化一般：37 人（51%）
＊上の 5 人の例に見られるように、事項を列挙するタイプの回答の多くが「文化」という語を挙げた。

（2）風土、地理、人々、日常生活、伝統：35 人（49%）
＊具体的な内容として、「料理・食事」（11 人）、「流行」（2 人）、「侍」（2 人）、「温泉」（1 人）、「大都市」（1 人）、「手工業、建築、庭園」（1 人）が挙げられた。

（3）歴史：23 人（32%）
＊具体的な内容として、「明治政府」（1 人）が挙げられた。

「歴史」が意外と多いように感じられるが、この点については大学の学科組織に関する日独の違いを考慮に入れなければならないであろう。すなわち、日本の大学においては一般に歴史が史学科で学ばれるのに対し、ドイツでは歴史学科ではヨーロッパ史しか扱わず、それ以外の地域の歴史は、それぞれの地域と関連した学科の枠内で行われる。したがって、日本史は日本学の一分野ということになる。

（4）ポピュラーカルチャー（漫画、アニメ、ビデオゲームなど）：19 人（26%）
＊「メディア」という回答（2 人）もここに含めた。
＊具体的な内容としては「アニメ」（4 人）、漫画（3 人）、「ビデオゲーム」（3 人）、「カラオケ」（1 人）、「ニンテンドー」（1 人）が挙げられた。

（5）言語：18 人（25%）
＊具体的な内容としては「文字」（2 人）、「敬語」（1 人）が挙げられた。その他は「言語」としか記されていなかった。

（6）社会・宗教・メンタリティー：13 人（18%）
＊「お祭り」（1 人）もここに含めた。

（7）音楽：12 人（17%）
＊具体的な内容としては「古典と現代の音楽」（1 人）、「J ポップと J ロック」（1 人）が挙げられ、それ以外は「音楽」とのみ記されていた。
＊「ポピュラーカルチャー」との重複回答は 2 人のみであった。

（8）美術：8 人（11%）
＊「古典と現代の美術」（1 人）以外は、「美術」または「美術史」と記された。

（9）文学：8 人（11%）
＊すべて「文学」とのみ記された。

（10）映画：5 人（7%）
＊すべて「映画」とのみ記された。

（11）スポーツ：4 人（6%）
＊このうち 2 人が「空手」を、1 人が「相撲」を挙げた。

このほか 8 人が「すべてに関心がある」旨の記述をした。

項目 C．近い将来日本に留学する予定

「近い将来、日本に留学する予定はありますか。もしあるなら、それはいつですか。」という質問に対する回答は以下のように分類される。

（1）基礎課程修了後にできれば留学したい：49 人（68%）
（2）基礎課程修了以前でも留学したい：8 人（11%）
＊この中には「できるだけ早く」（3 人）、「準備ができたらすぐに」（1 人）が含まれる。

上記二つを合わせると、57 人（79%）が日本への留学予定を表明した。ただし、これは専攻 1 学期目の段階なので、予定というよりも希望といった意味合いが大きいと考えられる。

（3）現時点で留学を考えていない：8 人（11%）
（4）留学する気はあるが、時期はわからない：2 人
（5）その他の回答：5 人
＊このうち 2 人は、はっきりと表現はしていないが、記載内容から見て基礎課程修了後の留学を考えている可能性がある。残り 3 人の回答は、「やや遠い将来に」、「サマースクールに」、「見通しはないが、（日本で）学籍が取れるなら」であった（括弧内は筆者による補足）。

それでは、日本学科の学生でじっさいに日本へ留学する者はどれくらいいるのであろうか。

トリーア大学と相互の留学に関する提携を結んでいる日本の大学は、麗澤大学（1994 年以来）に始まって、現在では 9 校に及んでいる（ほかに東京学芸大学、奈良女子大学、大阪学院大学、弘前大学、上智大学、大東文化大学、早稲田大学、東北学院大学）。それぞれの提携校に毎年 1～5 人ずつ留学するとのことであるが、日本留学者数は年によってばらつきがある。2009 年 2 月に得た情報によれば、2008 年 10 月から 5 人が留学しており、2009 年 10 月からは 14 人が留学することになっていた。また、このほか 2008 年に上智大学の夏期講座（1 ヶ月）に 3 人が参加したとのことであった（以上、香月氏からの情報による）。

6. アンケートのまとめと反省

上のアンケート集計結果から明らかになった点の中で、以下の 3 点が注目に値する。

（1）日本語学習の理由（質問項目 A）として「日本人・日本文化に対する関心」の回答（74%）が多かったのは予想されたことであったが、「言語への関心」（71%）も同じ程度に多かったのは意外であった。ヨーロッパにおけるアジアの言語の学習者に共有される傾向なのかどうか興味深い。
（2）日本に対する興味の内容（質問項目 B）に関し、当初かなり多いと予想した「漫画やアニメ等のポピュラーカルチャー」の回答（26%）がそれほど多くはなかった。社会一般で

の流行現象が大学での専攻とそれほど強くは結びつかないのかもしれない。第 2 章で述べたように、日本学を専攻して修士号を取得するのは容易なことではない。それを充分に覚悟した学生だけが日本学を選んだはずであるが、彼女ら／彼らの関心が必ずしも日本のポップカルチャーに偏っているわけではないことがわかった。

（3）上記とは反対に、日本に対する興味の内容として「歴史」（32%）や「言語」（25%）を挙げる学生がポップカルチャーと同じ程度いるのは意外であった。上の結果と合わせて考えると、学術的な関心から日本学専攻を選択する学生が一定の層を形成しているといえる。

本アンケート調査の反省点として以下の二点が挙げられる。

・被調査者たちは日本学専攻として必修の「日本語」を履修しており、いわば日本語は専門分野の研究にとって不可欠な手段である。したがって、「なぜ日本語を学んでいますか。」という質問は、わかりきったことを訊ねる愚問であって、本来なら「なぜ日本学を主専攻に選んだのですか」という質問にすべきであった。ただし、幸いなことに学生たちはこの後者の意味で回答してくれた。

・日本に対する興味の内容（質問項目 B）に関し、上述のように、いくつかの事項を列挙するだけの回答が多く見られた。こうした単純な回答を避け、強い関心をもつ事項についてある程度詳しく書いてもらうためには、例えば「もっとも興味深いものを二つまで挙げて、それについて説明してください。」といった文を付け加えるなどの工夫が必要であったと考える。

7. 参考：法学部の集計結果

法学部の「日本語１」および「日本語会話」の受講者に対しても、日本学科と同じ内容のアンケート調査を行った。ただし、回答者が少ないので、あくまでも参考までにその集計結果を簡単に報告する。

アンケート調査の実施日と回答者数は以下のとおりである。いずれも筆者が説明し回収した。

日本語１（回答者 8 人）：2007 年 1 月 30 日
日本語会話（回答者 4 人）：2007 年 2 月 2 日 [7]

以下、それぞれのクラスごとに報告する。

7.1　日本語 1

「日本語１」の回答者 8 人（女性 5 人、男性 3 人）の国籍はドイツが 7 人、マケドニアが

1 人であり、ドイツでの大学在学期間は 1 学期目が 6 人、5 学期目と 7 学期目が 1 人ずつであった。また、全員が法学専攻で、最終目標は国家試験（法学士）であった [8]（したがって副専攻は必要ない）。ドイツ以外の国での学習経験としては、1 人がアテネで 2 学期間学んだ。

「日本語を学ぶ理由」（質問項目 A）としては、以下の回答があった。

・日本文化に対する関心（3 人）
・アジアの言語に対する関心（2 人）
・好奇心（2 人）
・職業上のチャンス（2 人）
・国への関心（1 人）

「日本に関する興味の対象」（質問項目 B）としては、以下の回答があった。日本学科と同様、事項を列挙した回答が多く、具体的な記述を含む回答は 2 人だけであった。

・文化（6 人）
　＊具体的な内容として、「自分たちのとは異なる音楽文化」があった。日本学科のさいの分析と異なり、ここでは音楽は文化の中に含めた。
・メディア、漫画、アニメ（3 人）
・歴史（2 人）
・言語（2 人）
・生活、食事、風土（2 人）
・経済（2 人）

その他の回答には、「アジア地域における外交的立場」、「格闘、体操」があった。

「日本への留学予定」（質問項目 C）に関しては、以下のように 8 人中 7 人が具体的時期を挙げて留学の意思を示した。

・４学期目の後に留学したい（4 人）
・第一次国家試験の後に留学したい（3 人）
・詳しい計画は立てていない（1 人）

7.2　日本語会話

「日本語会話」の回答者 4 人（女性 2 人、男性 2 人）は全員がドイツ国籍で、ドイツの大学での在学期間は 5 学期目が 3 人、13 学期目が 1 人であった。メディア学と日本学を主専攻とする学生が 1 人参加していて、彼女だけが修士号取得をめざしているが、他の 3 人は法学を専攻しており国家試験を最終目標にしている。法学専攻の 1 人は副専攻として ‘Ostasienzertifikat’ と記しているが、これは 3.節で述べた履修証明「東アジア研究」を指す。

ドイツ以外での学習経験としては、1 人が東京の大学に 2 学期間留学し、1 人が上智大学の夏期講習に参加した経験をもつ。

「日本語を学ぶ理由」（質問項目 A）への 4 人の回答は、以下のとおりである。

・「旅行の準備。仕事で使うかもしれない。」
・「アニメを通して文化に関心」
・「関心」（2 人）。

「日本に関する興味の対象」（質問項目 B）への 4 人の回答は、以下のとおりである。

・「新しい／古い文化、文学、ポピュラー音楽、社会＋法体系」
・「メディア、ポピュラーカルチャー、若者の発達、言語変化、（寿司）」
・「言語、文化一般」
・「言語、文化」

「日本への留学予定」（質問項目 C）への 4 人の回答は、以下のとおりである。

・「試補研修（Referendariat）[9] で日本へ行きたい。」
・「2007 年 10 月から弘前大学へ留学。」
・「今年」
・「日本で学べればいいが、すぐには見込みがない。しかし、個人（旅行）ではすぐにでも行きたい。」

7.3　法学部のまとめ

回答数は少ないものの、法学部の日本語学習者に関しても、日本学専攻の学生とほぼ同様の傾向が見られる。「日本語を学ぶ理由」や「興味の対象」への回答からは、文化一般への関心とともに、言語への関心が非常に高く、また歴史やポップカルチャーへの関心も一定数存在する。経済や法体系への関心も示されているのは、法学部ならではといえる。将来の職業との関連に触れた回答も複数ある。「日本への留学」志向に関しては、日本学科の学生よりも強いといえる。

８．おわりに

筆者は、本調査実施まで海外における日本語教育事情に関する調査に携わったことがなく、また本調査を実施するにあたっても、先行研究を調べた上で調査項目を設定するなどの周到な準備をする時間的余裕もなかった。至らぬ点が多いかとは思うが、調査結果や調査方法の反省点がこの分野の研究者に少しでも役に立てれば幸いである。

北海道言語文化研究 北海道言語研究会
No. 9, 125-140, 2011.

謝辞

本アンケート調査の実施にさいして、またその後の情報提供において、次の方々にはたいへんお世話になった。この場を借りて感謝の意を表したい。香月典子氏（トリーア大学日本学科教員）、Ulrike Poelcher 氏（当時トリーア大学日本学科秘書）、高橋優氏、林美香子氏（以上 2 人は当時留学中）、萩原恵介氏、北嶋裕氏（以上 2 人は当時および 2010 年 1 月現在も留学中）。

注

1) この節で挙げるデータは、主としてトリーア大学 HP（www.uni-trier.de）> Profil > Zahlen und Fakten の中の各年次の統計文書（例えば、2009 年であれば "Universität Trier in Zahlen 2009"） に基づく（2009 年 12 月～2010 年 1 月に検索）。
2) 日本学科 HP は、トリーア大学 HP > Fachbereiche und Fächer > Japanologie で検索する。なお、2000 年までのデータに基づくものではあるが、ドイツの大学における日本学専攻の設置状況については、カイ・ゲーネンツ「日本ブームから 20 年―ドイツにおける日本語教育の現状と問題点―」（『日本語教育事情報告編　世界の日本語教育』第 6 号、2001 年、国際交流基金日本語国際センター、73-88 頁）を参照。
3) 冬学期（Wintersemester）は 10 月から 3 月まで、夏学期（Sommersemester）は 4 月から 9 月までの学期を指す。
4) 日本やアメリカなど多くの国では大学入学前の初等・中等教育の期間が 12 年であるが、ドイツでは 13 年であるため、学士号（Bachelor）取得までの基本的な期間が 3 年とされている。
5) ただし、2 学期目の「日本語２」からは受講者が減ったため、2 クラス編成になったとのことである。
6) 例えば 2009／10 年冬学期の日本学科の開講授業を検索したければ、以下の順にクリックする：トリーア大学 HP > Vorlesungsverzeichinis > Vorlesungsverzeichnis Wintersemester 2009/10 > Fachbereich Ⅱ > Japanologie（日本学科が Fachbereich Ⅱに所属することを予め知る必要がある。Fachbereich は日本の学部に相当する）。数年前までの授業一覧も検索可能である。
7) このクラス（北嶋裕氏担当）の当該学期における正式名称は、Sprachpraktische Übung: Japanisch IV（言語実践演習：日本語 4）であった。
8) Das Erste Staatsexamen（第一次国家試験）を指す。民法、公法、刑法からなる必修領域の筆記試験（計 6 回）と口述試験、さらに選択領域の試験（30%の配点）が行われる。国家試験といっても、ドイツでは各州が管轄しており、大学が州当局から委託されて実施するものである。この試験の現在の名称は、Die Erste Juristische Prüfung である（大学 HP > Fachbereiche und Fächer > Rechtswissenschaft > Prüfungen のサイトより）。なお、この試験の 2008 年合格者の平均在学期間は、10,1 学期（約 5 年）であった（「大学の統計 2009 年」46 頁）。
9) 第一次国家試験の合格後、第二次国家試験を受けるまでの間の官庁、企業、法律事務所などでの実務研修を指す。

執筆者紹介
氏名：田村建一
所属：愛知教育大学日本語教育講座
Email：ktamura@auecc.aichi-edu.ac.jp